

INDEX

第26回全国大会を迎えて.....	2
第26回全国大会のお知らせ（最終報）.....	2
設立25周年記念シンポジウム報告.....	3
冬の合宿研究会のご案内（第一報）.....	6
研究会の発表募集「テーマ：メディアの活用と教育・学習環境」.....	7
研究会の発表募集「テーマ：ICTを活用したFDと大学・高大連携」.....	7
研究会の開催報告.....	7
論文誌特集号論文募集「特集：新時代の学習評価」のご案内（第三報）.....	8
第26回通常総会議事録.....	9
理事会議事録等.....	9
新入会員.....	11
学会日誌等.....	12

日本教育工学会 第26回全国大会を迎えて

会長 永野和男（聖心女子大学）

第26回日本教育工学会全国大会を名古屋の地で開催できますことを、皆様とともに喜びたいと思います。日本教育工学会は、昨年11月1日に、25周年を迎えましたので、今回は25周年記念大会ということになります。その記念の一つとして、今回は、中国から3名、韓国から1名の教育工学研究者を御招待して、研究発表をお願いするとともに、情報交流を行うことになっています。近隣諸国との国際交流の拡大は、学会にとっての新しいテーマです。

さて、今回の全国大会ではシンポジウムや課題研究として新しい重要なテーマがたくさん取り上げられています。また、研究発表も、例年のように多様な領域にわかれ、沢山申し込まれています。昨年度から始めたワークショップも「学習障害の支援」「FDと高等教育」「オンラインテスト」「情報リテラシー教育」と魅力的です。

実用的な側面を強調した実践的な研究や経験報告、将来を見据えた基礎的な調査や実験的な研究、そして開発研究と教育工学の研究発表は多種多様です。対象領域が限定されている訳ではないので、全体を総括できるような研究は少ないかもしれませんが、しかし、これらのばらばらに見える研究発表やワークショップの中に、近い将来の問題解決の基盤となる考え方や、芽が埋もれていることも事実です。研究発表される方は、研究の内容と方法を会員に公開して、ご自身の研究がどのように位置づくのか鋭く感じ取ってもらえればと思います。また、他の研究発表の内容を知って、ご自分の研究の発展に役立つものを見出していただきたいと期待しています。是非ご参加ください。

最後に、この大会を企画・準備し実行していただいた大会企画委員会の方々、会場を提供していただいた金城学院大学と大会実行委員会の方々、協賛や展示で協力いただいた企業の方々にも、心から感謝申し上げます。

日本教育工学会 第26回全国大会のお知らせ（最終報）

大会Webページ：<http://www.jset.gr.jp/taikai26/>

日本教育工学会第26回全国大会を金城学院大学において開催します。合計466件（シンポジウム12件、一般研究400件（うちポスター106件）、課題研究37件、インターナショナルセッション17件）の発表と、ワークショップ10件が予定されています。多くの方々のご参加をお待ちしています。詳細は、大会Webページ、本ニュースレターに同封されております参加案内（プログラム）をご覧ください。

1. 開催期日・会場

期日：2010年09月18日（土）～20日（月）（3日間）

会場：金城学院大学 〒463-8521 名古屋市守山区大森二丁目1723

※敷地内全面禁煙

※名鉄瀬戸線「大森・金城学院前」駅下車、北改札口を出て徒歩約7分

※金城学院大学までの経路案内

<http://www.kinjo-u.ac.jp/ghase/keiro3/kinjo.html>（印刷してご利用ください）

後援：文部科学省、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、岐阜県教育委員会、三重県教育委員会

2. 大会日程

第1日 9月18日（土）	第2日 9月19日（日）	第3日 9月20日（月）
9:00～18:30 受付	9:00～16:00 受付	9:00～15:00 受付
10:00～12:00 一般研究発表1	9:30～12:30 一般研究発表3 International Session	9:30～12:30 一般研究発表4 International Session
12:00～13:30 昼食、各種委員会	12:30～14:00 昼食・理事会	12:30～14:00 昼食・
13:30～15:30 シンポジウム1	14:00～14:30 全体会	大会企画委員会
15:50～17:50 一般研究発表2	14:45～17:30 シンポジウム2	14:00～16:30 課題研究発表
18:00～19:30 ワークショップ	18:00～20:30 懇親会	
9:30～17:50 企業展示	9:00～14:30 企業展示	

*ポスター発表が19日と20日の一般研究発表3,4の一部で行われます。企業展示が18,19日に開催されます。ぜひ見学にお立ち寄り下さい。なお、2日目の全体会では、研究奨励賞及び論文賞の表彰等があります。懇親会の会場はリリーイースト(生協食堂)です。懇親会会場にてハンドベルコンサートを行います。ぜひ懇親会にもご参加ください。

3. 大会当日の受付について

★参加登録者の方は、電子メールで送られた「大会参加票」等をプリントしてお持ち下さい。

①事前送金済みの場合

- ・電子メールでお送りした「大会参加票」を、大会受付の「事前送金済参加者」窓口でお渡し下さい。電子メールの件名は「大会管理より受付番号を発行しました」となっています。
- ・お支払いいただいた金額に応じて、大会プログラム、大会論文集等をお渡しします。
- ・プリントして持参していただいた「大会参加票(名札用)」を名札ケースにお入れ下さい。
- ・大会参加票をお忘れになる場合に備えて、できれば受付番号をメモしておいてください。
- ・大会参加票を持参されなかった方は、当日会場に掲示される「事前送金者リスト」で番号を確認の上「事前送金済参加者」窓口にて、その旨、お申し出ください。
- ・送金金額に不足があり、大会当日に差額をお支払いいただく場合は、「総合受付」でお受けします。

②当日参加の場合

- ・当日参加者は、大会受付にて、「当日参加受付票」に必要事項を記入して、それを大会受付の「当日参加者」窓口にてお渡し下さい(名刺をお渡し下さる場合は、連絡先住所等の記入を省略することができます)。
- ・ただし、学会ホームページから参加登録を行った会員は、自動送信されたメールをプリントしてお持ちください。会場で「当日参加受付票」に記入していただく必要がなくなります。
- ・お支払いいただいた金額に応じて、大会プログラム、大会論文集等をお渡しします。
- ・名札ケースに名刺を入れるか、お名前をカードに書いて入れてください。
- ・懇親会費を支払われた場合は、名札にマークを貼らせていただきます。

設立25周年記念シンポジウム報告

2010年06月19日(土)に、聖心女子大学宮代ホール等を会場にして、日本教育工学会設立25周年記念シンポジウムが以下のように開催されました。

第1部(10:00~11:50)「研究方法論を探る(私の教育工学研究—この10年の潮流を踏まえて—)」は、宮田 仁氏(滋賀大学)による司会のもと、教育工学研究の諸領域のうち4つのものについて、若手研究者に特色ある研究事例を報告してもらい、それらをここ10年間の教育工学研究の中に位置づけることを通じて、教育工学研究の潮流や展望等に関する共通理解を図ることを目的として行われました。

金西計英氏(徳島大学)は、システム開発の立場から、事例を提示しつつ、多様な大学教職員層が自らシステムを開発し、実践し、それを発表するという研究潮流やそれに必要とされるメタ的な研究枠組みに言及しました。

高橋 純氏(富山大学)は、情報教育の実践研究の立場から、小学校の教科の一斉指導における持続可能なICT活用に関する研究事例を示しました。そして、それらが、過去の情報メディアの成果を応用したものであること、教員の教授の補助具としてのICT活用に焦点化したものであることを説明しつつ、その今日的意義を整理しました。

村上正行氏(京都外国語大学)は、教育方法の改善という立場から、高等教育におけるICTを活用した授業デザインと評価に関する研究事例を報告しました。特に評価については、量的なアプローチに加えて、インタビューやエスノグラフィーといった質的な方法を取り入れながら、その精度をあげていくという展望を示しました。

辻 義人氏(小樽商科大学)は、認知領域の研究の立場から、対面説明場面における説明者の情報処理モデルの検討に関する研究事例を報告しました。加えて、モデル



化とその検証という研究アプローチに関して、そのメリットとデメリットについて、説明しました。

各報告者からの発表をふまえ、山内祐平氏（東京大学）による総括が行われました。同氏は、金西氏の研究を「e-learning研究」、高橋氏の研究を「教育メディア研究」、村上氏の研究を「遠隔教育研究」、辻氏の研究を「教育認知研究」と分類し、それらを教育工学研究の系譜に位置づけました。そして、そうした系譜をもとに、ここ10年の教育工学研究について、「システムと教育実践のはざま」という表現を用いて、「システム」と「実践」が両輪として研究の中で絡み合っている特徴が現れていると整理しました。

続いて、山内氏から各報告者に対して、「システムと実践という複雑な事象を『両方』取り扱うための研究方法のポイントは何か」という問いが投げかけられました。この問いに対して、辻氏からは、全体的な視点からシステムの効果を捉え、モデルとして構築することの必要性が示されました。村上氏からは、様々な研究分野や研究方法を学び続ける必要があるという意見が出されました。高橋氏は、外部から新たなものが持ち込まれることに対して実践者が抱く抵抗感について言及し、教師・子どもの行動をよく捉え、彼らが日々悩んでいる事柄にアプローチしていく必要性を示しました。金西氏は、教育のシステムが複雑化することによる学問の深まりに期待するとともに、その成果を活用していくことが必要ではないかと述べました。

各氏からの意見をまとめて、山内氏より、研究の視点の階層設定を行うこと、各研究をマイクロパッケージ化すること、それにより妥当性を失わないで研究の方法を共有していくことが総括的に提案されました。なお、本セッションにおける提案および議論は、80名を超える参加者に共有されました。

第2部（14:00～16:30）「日本の教育、これからの10年(学会の役割と連携を探る)」は、山西潤一氏（富山大学）の司会で、150名近くが参加しました。シンポジストは、村井 純氏（慶應義塾大学）、岡本敏雄氏（電気通信大学）、市川伸一氏（東京大学）、永野和男氏（聖心女子大学）という各学会を代表する顔ぶれでした。

村井氏は「グローバル空間とインターネットー日本、教育、これからの10年ー」と題して、まずクラウドコンピューティング（Cloud computing）がどのようなインパクトをもつかを解説しました。また、教育は本来、国に固有の営みだが、インターネットによって各国の知識や情報が共有され、いろいろなサービスがグローバルに提供されるようになったこと、国や教育をどのように捉えるかがこれから10年を考えるときのベースになることなどを述べました。さらに、映像データのキャリア、クリエイティブコモンズ（creative commons）、自律分散性などのキーワードを挙げながら、大学の授業のグローバル化にも言及しました。最後に、インターネットがつながっているときのヒトの行動はいかようなものか、ヒトの創造性をデジタルテクノロジーでどのように支えられるか、日本人は世界でどのようにふるまっていけるか、という問いを投げかけました。

次に、岡本氏が「非構造化時代の経済の様相と教育形態のかたちー教育における情報システム学の視点からー」というタイトルで報告しました。世界の経済状況に触れた後、日本がキャッチアップの時代から知恵づくりの時代に移行していることやウェブ技術の発展に言及しつつ、ウェブ上で繰り返される浅い知識理解への危惧も述べました。また、教育に関わる情報システム、SNSと能力開発環境にも言及した後、学習エコロジー新モデル（New Model of Learning Ecology）、世界規模での知識の共有とSNSアーキテクチャにもとづくシステム・コンフィギュレーション（System Configuration based on SNS architecture）を紹介されました。さらに、教育工学会に期待することとして、現実の問題をふまえた基礎研究、国際レベルで通用する研究内容と研究者養成の仕組み、誰もが経験できる教育についての科学的・工学的な意味での専門性と他学問に対する学術的説得性を挙げられました。

「今後の教育動向と学際連携ー習得・活用・探求から人間力形成までー」と題して報告した市川氏は、教育問題と教育改革の変遷にふれた後、昨今の学力低下論争を2軸で整理しました。2005年の中教審答申以降、学習指導要領にも反映された、既存の知識を習得するサイクルと探求のサイクルという2サイクルモデルを、低学年レベルと高学年から大人レベルに分けて説明しました。次いで、学習・教育研究に関する学問分野マップ図を使い、教育工学を実践的・実証的研究であると位置づけました。さらに、認知心理学に立脚した学力調査、「教えて考えさせる授業」を紹介したり、人間力形成の実践を例示し



たりしながら、実践の場を軸にした共同研究体制づくりの重要性を説きました。

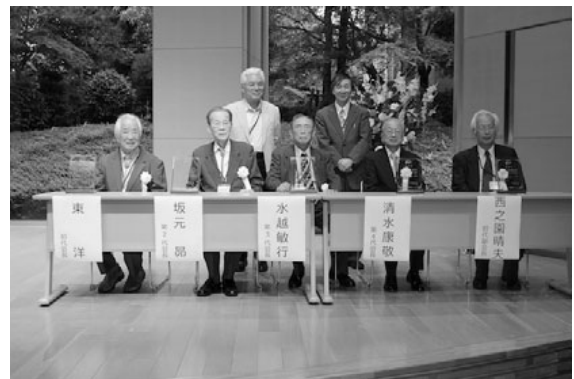
全体討論では、フロアから、グローバル化に対するこれから10年のビジョンについて質問がありました。村井氏から、インターネットによって実現されたグローバル社会では基本的に文化は多様化するので、日本で尊重すべき文化は何か、日本が世界にどう貢献できるかを検討すること、日本の社会を地球規模で考えることが重要であるとの回答がありました。次に岡本氏は、ICT技術が進展すると、その使い方のグローバル化が進む一方で、コンテンツは言語や文化、価値観に依存するため、日本人としてのセンスが問われることになると話しました。永野氏からは、ネットワークが解放され、情報がグローバル化したとき、情報を制御する人の存在とその影響力の大きさが指摘されました。それに続き村井氏は、現在の状況は日本にとって明治維新の頃に似ていること、グローバルな空間で生きるという視点で子どもたちを育てるために、文化としての空間をどのようにグローバル化していくか、デジタルコミュニケーションの時代をどうやって生き抜いていくか、という議論が必要であると述べました。

永野氏は、ICTによって、教育が時間を超えて、あるいは空間を超えて可能になり、情報処理の道具を個人が持ち歩ける時代が来たとき、ヒトに求められる能力は変化することを前提にしつつ、情報がいつでもどこでも必要に応じて取り出せるように整備された社会では、多様な情報からの確かな情報を選択し、問題解決に適用する力を育むのが初等・中等・高等・社会教育を貫く目的になると述べました。また、同氏は、今後10年、学校がどこまで変化できるかについては、学習指導要領がある以上、制度的に学習内容・方法を大きくは変更できないが、他方で、ネットワークの教育利用や遠隔協同学習、学習の道具としてのコンピュータなどがいっそう重視されるようになること、ICTの視点から今後10年を読むと、誰でも映像を制作・発信できるようになり、現実とバーチャルが区別できにくく、評価から判定までを短い時間で遂行しなければならないので時間のかかる取り組みが評価されにくくなること、真偽の吟味が困難なため一部の情報で世界がコントロールされる可能性もあること、時間をかけて吟味すること、多様な価値やものの見方の育成、モラルやエチケットの指導が重要であることも述べました。

山西氏からの、学校現場の教員と一緒に実験する難しさや学校外を志向するものよいのではないかという問いに対して、市川氏からは、実践の場をつくりあげていくために歴史を積み重ねていく必要性が説かれました。岡本氏からは、知識や概念がどう適応していくのか、広がりのある学習環境をウェブでモデリングする可能性が示唆されました。また、フロアから、日本の知識人のふるまい方や学会が政策提言の過程で何を言えるか、学校における教育問題やテクノロジーの介入等についての質問が呈され、登壇者がそれらに対して、持論を提示しました。

最後に学会の若い会員へのメッセージとして、村井氏は「学会として健全な発展を目指していただきたい」と、また岡本氏は「教育工学会には実践の学の領域として、今後も実証を重ね、知見を体系化する努力をしていただきたい」と述べました。最後に市川氏からは「教育工学の『工』は工夫の『工』である」という指摘や、「開発志向性が強くテクノロジーに強い教育工学会と、教育心理学会と一緒に実践をつくりあげていく場がもて、それぞれの長所をいかせることを祈っている」と学会間の連携を望む発言がありました。フロアから湧き上がる拍手の中、教育工学会のこれからの10年を見据えたシンポジウムは幕を閉じました。

第2部に引き続き、日本教育工学会25周年記念表彰として功労者への表彰状贈呈が行われました。山西氏の司会のもと、贈呈に先立ち永野会長より挨拶がなされました。今回の表彰者は、初代会長の東洋氏、第2代会長の坂元昂氏、第3代会長の水越敏行氏、第4代会長の清水康敬氏、初代・第2代副会長の西之園晴夫氏の5名でした。また、表彰者を代表して、坂元氏よりご挨拶を頂戴しましたが、同氏から、学会設立時の秘話が紹介され、日本教育工学会の25年の歩みに思いを馳せるひと時となりました。



そしてさらに、会場を聖心女子大学の学生食堂に移し、第3部（17:00～19:30）「25周年記念感謝の集い（記念パーティー）」が開かれ、80名近くが参加しました。表彰者5名を主賓席にお迎えし、木原俊行氏（大阪教育大学）と堀田龍也氏（玉川大学）の司会で宴は進められました。永野会長の挨拶の後、功労賞受賞者の東初代会長から会員を励ますお話がありました。赤堀前会長の音頭で、シャンパンで乾杯しました。受賞者の水越第3代会長から会員への激励の言葉、西之園初代・第2代副会長から学会創生期の逸話が呈されました。宴の終盤、受賞者の清水第4代会長から会員にエールが送られ、永岡副会長の挨拶で閉会となりました。終始和やかな雰囲気、学会を創生した初代会員から若手会員までが意見を

交換し合う楽しい時間となりました。



2010年度 冬の合宿研究会のご案内（第一報）

■テーマ：質的データを分析しよう！ ―質的研究におけるデータ分析入門―

近年、教育工学の分野においても、質的な研究手法を用いた研究が増えてきました。質的研究手法は、量的研究手法のように仮説検証を目的とはせず、観察やインタビューなどで得られた質的なデータを、その個性や具体性に即して分析し、その事象に内在する意味を明らかにしようとする手法です。

質的研究は、現象学や社会的構成主義などの多様な思想的背景を有しており、グラウンデッド・セオリー・アプローチやエスノメソドロジーなどの多様な手法が存在しています。質的研究のデータ収集やデータ分析に関して、いわゆる「ハウツー」は存在しないと言えます。

しかしこのことが、質的研究に取り組む際の高い障壁になっていることも事実です。ですから、とくに初学者にとって、まず基本的なデータ分析手法について知り、それらの手法をある程度使えるようにしておくことが必要です。そのため本合宿研究会では、基調講演などを通して質的研究について理解を深めるとともに、初学者でも利用しやすい質的データ分析手法「SCAT」を用いて、実際にデータの分析にも挑戦する予定です。質的研究に初めて触れる方だけでなく、すでに質的研究を行っている方にとっても、有意義な合宿研究会にしたいと思えます。美しい雪景色の札幌で、みなさまとお会いできるのを楽しみにしています。

■期日：2011年02月19日(土)14:00～20日(日)12:00

■会場：チサンホテル札幌（札幌市中央区北二条西2-9）

- ・ <http://www.solarehotels.com/chisun/hotel-sapporo/>
- ・ JR札幌駅南口、札幌市営地下鉄さっぽろ駅・大通駅より徒歩5分
- ・ 新千歳空港からは、JRの快速電車を利用すれば40分程度で札幌駅に到着します。

■対象：質的研究に興味のある研究者、学生等

■定員：30名（定員になり次第締め切ります）

- ・ <http://reas2.code.ouj.ac.jp/cgi-bin/WebObjects/REAS?t=14037> よりお申し込みください。
- ・ 10月末までは学会員のみ参加申し込みが可能です。それまでに定員に達しなかった場合、11月1日より非会員の参加申し込みも受け付けます。

■参加費：12,500円（予定）

■プログラム（予定）

【一日目】02月19日(土)

基調講演：大谷 尚（名古屋大学大学院）

この後、SCATを用いたデータ分析に関するワークショップなどを行います。

【二日目】02月20日(日)

1日目に引き続きワークショップなどを行い、最後に全体でのリフレクションを行います。

※なお、SCATについては以下のサイトをご覧ください。

<http://www.educa.nagoya-u.ac.jp/~otani/scat/>

■開催担当・問い合わせ先：金子大輔（北星学園大学）

メール：kaneko@hokusei.ac.jp 電話：011-891-2731(代) (内線2208, 金子をお呼び出してください)

* 詳細及び参加申込みの手続きについては、日本教育工学会Webサイトの該当ページにてご確認ください。

日本教育工学会研究会

<http://www.jset.gr.jp/study-group/>

■研究会の発表募集

【テーマ：メディアの活用と教育・学習環境／一般】

日 時：2010年10月23日(土)

会 場：茨城大学(担当：関 友作)

申込締切：2010年08月22日(日)

原稿提出：2010年09月12日(日)

募集内容：

各種のメディアを有効に活用することは、以前から、教育工学のひとつの基盤になっています。近年では、コンピュータ・インターネット・携帯機器をはじめ、さまざまな技術が実用化され、教育・学習の場面でも、広く活かされてきています。そこで、本研究会では、新旧の多様なメディアの活用が、教育・学習環境をどのように変えつつあるのか、をテーマにいたしました。学校はもちろん、企業内教育や社会人教育もふくめて、そうした内容の研究に携わっておられる方々の発表を、広く募ります。それにより、教育目的でのメディアの有効活用について、自由な議論や情報共有ができれば、と考えています。また、上記のテーマにはこだわらない教育工学一般における発表も幅広く募集しております。

【テーマ：ICTを活用したFDと大学・高大連携／一般】

日 時：2010年12月18日(土)

会 場：大分大学(担当：尾澤重知)

申込締切：2010年10月17日(日)

原稿提出：2010年11月14日(日)

募集内容：

高等教育におけるFD義務化、教育の質保証やIR (Institutional Research) の重視などの流れを受け、これまで以上にFDの組織化や、組織的なFDの取り組みが求められるようになっていきます。このような大学内部の動きと同時に、大学間の連携によるFDのネットワーク化や、教育研究面での共同、また、高大連携などの動きも活発になっています。いずれもICTの利活用や教育工学分野の知見が期待される分野であり、多くの実践研究が進められています。

そこで本研究会では、ICTを活用した教育改善の取り組み、大学間・高大連携による教育実践やFDのネットワーク化、組織的な大学改革に取り組んでおられる方々の発表を募り、議論や情報共有を行いたいと考えています。また、上記のテーマにはこだわらない教育工学一般における発表も幅広く募集しております。

●発表募集に関して

- ・会員・非会員を問わず、本研究会は発表を募集します。
- ・申込方法：研究会Webページよりお申し込み下さい。
(<http://www.jset.gr.jp/study-group/>)
- ・原稿執筆：発表原稿提出締切後1週間以内に、申込時に登録されたアドレスに発表の採択結果と執筆要項を電子メールにて送付いたします。
- ・原稿提出：原稿の提出はPDF形式で、研究会Webページの「発表申込フォーム」より、発表申込時に発行された「受付キー」を使用してご登録下さい。尚、期限までに提出いただけない場合は、キャンセルとさせていただきます。
- ・発表申込者が「受付キー」の再発行や発表取り消し作業を研究会Webページ「発表申込フォーム」上で行えるようにシステムを更新いたしました。

■年間予約購読のお勧め

研究会報告集の年間予約購読価格は郵送料込みで3,500円です(当日売りは1冊1,000円と割高になります)。年間5冊、各研究会平均38件程度(2009年度実績)の研究発表が掲載されます。詳しくは、研究会Webページをご覧ください。

■研究会の開催報告

日 時：2010年07月03日(土)

会 場：電気通信大学

発表件数：29件

参加者数：87名

「新時代の学習評価：理論・システム・実践/一般」というテーマで研究会を開催いたしました。29件の発表があり、87名の参加者がありました。A会場では、新しい学習理論に基づく学習評価についての提案、議論が熱くされ、本当に実りある研究会となったと思います。専門家の聴講者が多く、新時代の学習評価という新分野が形成される芽となっていると感じました。また、B会場でも多くの実りある発表、議論がなされました。参加者の皆様のおかげで、大過なく研究会を終えることができました。研究会にご参加いただきました皆様に、心より御礼申し上げます。

担当：植野真臣(電気通信大学)



日本教育工学会論文誌 特集号 論文募集

「特集：新時代の学習評価」のご案内（第三報）

近年、学習理論の主流が構成主義に変化してきたことにより、評価理論はテストのみによる評価から、より自然で真正な文脈における評価へ移行しつつあります。一般の社会では人の能力をペーパーテストのみで評価することは少なく、むしろパフォーマンス（成果）で評価することのほうが多いといえます。また、一人の審査者が評価するより共同体の複数のメンバたちが評価することのほうが多いともいえます。最近の学習評価では、このような自然な学習評価の環境を重視し、従来からのテストの仕組みから抜け出し、より真正で実践的な評価が提案されつつあります。この特集号では、新時代の学習観、知識観に基づいて提案された新しい学習評価手法の理論研究、システム開発研究、実践研究についての論文を募集します。

1. 対象分野

- (1) 評価手法の開発・適用・実践（ポートフォリオ、ルーブリック、ピア・アセスメント、真正な評価、ダイナミック・アセスメント、など）
- (2) 評価システムの開発と適用・実践（eポートフォリオ、eテストング、教育データマイニング、自動作問、学習者協調作問環境、小論文自動採点技術、など）
- (3) 生理情報を用いた学習評価（脳科学、眼球運動、血圧情報、など）
- (4) 新時代の学力調査（PISA、新しい学力、学力観の変容に対応する評価、大規模学力調査、など）
- (5) 教育組織の評価（学校評価、大学評価、費用対効果、など）
- (6) 教育の質保証と評価（FD、ディプロマ・ポリシー、学生による評価、など）
- (7) その他の「新時代の学習評価」に関する理論・手法・システム開発・実践など

2. 募集論文の種類

通常の論文誌と同様に、「論文」「システム開発論文」「教育実践研究論文」「資料」「寄書」を募集します。投稿規程は通常の論文誌の場合と同じです。ただし、査読は2回限りとし、編集委員会が示した掲載の条件を修正原稿で満たさない場合は採録になりません。「ショートレター」として既に掲載されている内容を発展させて「論文」として投稿することも可能ですが、単に分量を増やして詳細に説明しただけでは発展させたことになりませんので、ご注意ください。なお、本特集号の対象分野外の論文が投稿された場合は、一般論文として扱うこととなりますので、あらかじめご了承ください。

3. 論文投稿締め切り日（2011年11月発行予定）

投稿原稿を2月8日までに電子投稿をお願いします。ただし、2月15日までは、論文を改訂することができます。締め切りの延長は行わない方針です。

投稿原稿提出締め切り（電子投稿）：2011年02月08日（火）

最終原稿提出締め切り（電子投稿）：2011年02月15日（火）

4. 論文投稿の仕方

原稿は、「原稿執筆の手引」(<http://www.jset.gr.jp/thesis/index.html>)に従って執筆し、学会ホームページの会員専用Webサイトから電子投稿して下さい。郵送による投稿は受け付けませんことになりました。

5. 問い合わせ先

電子メール：editor@jset.gr.jp

Tel/Fax：03-5740-9505 日本教育工学会事務局

第26回通常総会議事録

1. 日時：2010年06月19日(土)12:00～12:30
2. 会場：聖心女子大学 宮代ホール

3. 議事

議事に先立ち、永野会長より、25周年を記念して、①本日行われている記念シンポジウムを開催したこと、②「教育工学選書」を出版する準備を始めたこと、③学会ロゴマークを選定したこと、④事務運営の改善に取り組んでいること等を含めた挨拶があった。
永野会長が議長となり、議事を進行した。

1) 総会の成立について

出席者について報告があり、正会員2,033名中、会場出席者54名、委任状366通により、定款第47条「総会は、正会員総数の10分の1以上出席しなければ、その議事を開き、議決することができない。(以下略)」に照らし、総会が成立していることの報告があった。

2) 第1号議案「2009年度(2009.4.1-2010.3.31)事業報告及び収支決算承認の件」

堀田理事より、日本教育工学会ニューズレターNo.172のp2, p3の「2009年度事業報告及び収支決算」に関する議案資料に基づき説明があった。引き続き、生田監事より「6月16日に会計監査を実施し、適正かつ正確に処理されていることを確認した。」との監査報告があり、全会一致でこれを承認した。

3) 第2号議案「2010年度(2010.4.1-2011.3.31)事業計画案及び収支予算案承認の件」

堀田理事より、日本教育工学会ニューズレターNo.172のp4, p5の「2010年度事業計画案及び収支予算案」に関する議案資料に基づき説明があり、全会一致でこれを承認した。

4) その他

永野会長より、本年度の予算案については、これまでの会計処理を踏襲した費目で作成したが、来年度に向けて、会計処理システムの見直しを進めている旨の説明があった。

4. 表彰

学会ロゴマークの選定に関して、最優秀賞に選ばれた作者の三好健一氏に対する表彰が行われた。
以上

第13期第9回理事会・評議会合同会議・議事録

日時：2010年06月19日(土)13:00～13:50

場所：聖心女子大学332号室

出席：(理事)永野和男会長、永岡慶三副会長、山西潤一副会長、赤倉貴子、赤堀侃司、植野真臣、大久保昇、小柳和喜雄、木原俊行、向後千春、澤本和子、三宮真智子、清水康敬、南部昌敏、東原義訓、堀田龍也、前迫孝憲、宮田 仁、室田真男、矢野米雄、山内祐平、吉崎静夫
(評議員)石塚丈晴、鈴木克明、高橋 純、中原 淳、野中陽一、美馬のゆり
(監事)生田孝至、近藤 勲

1. 第13期第8回理事会議事録が承認された。

2. 新入会員の入会が承認された。

3. 各種委員会報告

(1) 研究会委員長より、委員の交代について説明があり承認された。

(2) 大会企画委員長より、来年度の大会開催は首都大学東京で行うことが確認された。

(3) 編集委員長より、「教育工学選書」について説明された。意見交換が行われ、読者層を明確にすることや、教育工学について体系的に展望できるような構成を考慮してほしいなどの意見があった。

- (4) 広報委員長より、学会ロゴマークを活かしたニューズレターの仕様の変更について説明された。
4. 評議員・監事から今後の学会の活動についての意見
以下のような意見交換が行われた。
- ・理事から評議員に転じた場合、伝わってくる情報量が大幅に減ってしまい、学会運営について検討することが難しくなることが指摘された。承認済の議事録等を、評議員にメールで送付するなどの対応を検討することとなった。
 - ・会長から総会で説明された事務組織の統合化について、ぜひ進めてほしいという要望が出された。会長より、会計管理の整備を行っており、今後、順次進めていく旨の回答があった。
 - ・英文誌の配布について国際学术交流の視点から見直しの必要があるのではないかと指摘が出された。今後、学会ホームページも含めて検討していくこととなった。
 - ・学会経費について、企画委員会予算が少なくなっている理由について質問があった。会長より、旅費の管理方式が変わったこと、今回のシンポジウムが25周年記念関連の別経費で行われたことに触れ、実質的には変わってはいないことが説明された。
 - ・「教育工学選書」に期待するが、学会として重要な出版物であることから、編集委員会ではなく会長のリーダーシップの下で進めてほしいとの要望が出された。会長より、今年度については編集委員会による案で進めるが、今後、出版担当理事を置き会長・副会長のもとで5年近く進めていくことが説明された。

以上

第13期第10回理事会議事録

日時：2010年07月17日(土)14:40～16:40

場所：聖心女子大学 グリーンパーラー

出席：(理事)永野和男会長，永岡慶三副会長，赤堀侃司，植野真臣，木原俊行，澤本和子，
三宮真智子，清水康敬，東原義訓，堀田龍也，前迫孝憲，室田真男，山内祐平
(監事)近藤 勲

1. 第13期第9回理事会議事録を承認した。
2. 会員の移動について承認した。
3. 各種委員会報告について
 - (1) 編集委員会
 - 1) 清水編集長より編集の進捗状況について報告された。
 - 2) 英文誌投稿規定を検討中である。
 - (2) 研究会委員会
 - 1) 研究会ホームページの改修を実施する。
 - 2) 研究会会場でのビラ配布や企業展示を許可する方向である。
 - (3) 企画委員会
木原委員長より冬の合宿研究会の参加者枠を30名とする旨の提案があり承認された。
 - (4) 大会企画委員会
 - 1) 東原委員長より大会準備が順調に進行中であることが報告された。
 - 2) 大会での落し物の取り扱いについては、会場校のルールをプログラムで明文化しておく必要があることが確認された。
 - (5) 顕彰委員会
審議の結果、研究奨励賞は2名，論文賞は1名とすることが承認された。候補者は以下の通り。
第25回研究奨励賞 山田政寛（金沢大学）・椿本弥生（東京大学）
第24回論文賞 森玲奈（東京大学）
 - (6) 選挙管理
9月の理事会で、役員改選のための選挙管理委員会を発足したい旨の提案があった。
 - (7) 国際交流
大会に韓国と中国から招待する件について具体的な提案があった。
 - (8) 特別企画（FD）
過日実施されたFD講習の認証が発送済みであることが報告された。
 - (9) 事務・統括

- 1) 会長交代に伴う銀行等関係機関の名義変更手続きが最小限になるシステムを構築中である。
- 2) 委員会が管理する経費の執行原則を明文化する。

4. 委員任期の切り替えについて

会長より、編集委員会および広報委員会の変更無し、企画委員会および研究会委員会は変更を承認済みであることが報告された。

以上

新入会員

(2010年05月06日～07月12日) 81名 (正会員：36名, 学生会員：40名, 准会員：5名)

■正会員 36名

藤原毅夫 (東京大学)
松山明道 (人吉市立中原小学校)
稲葉利江子 (京都大学)
益子行弘 (東北公益文科大学)
副田恵理子 (藤女子大学)
日向野幹也 (立教大学)
磯部征尊
(新潟大学教育学部附属新潟小学校)
橋本光明 (信州大学)
金平蓮 (藤田保健衛生大学)
豊瀬仁須 (田川市立田川中学校)
青嶋茂元
下村聡
(エドウェアエデュコム教育システム研究所)
大野昌宏 (釧路市立鶴野小学校)
圓林真吾 (進学教室浜学園)
竹内典彦 (北海道情報大学)
大河内佳浩 (千歳科学技術大学)
藤井玲子 (愛知東邦大学)
本間里見 (熊本大学)
大橋 淳 (京都仏眼医療専門学校)
藤沢匡哉 (東京理科大学)
藤堂貴弘 (姫路獨協大学)
石塚博規 (北海道教育大学旭川校)
及川義道 (東海大学)
明星智美 (日本福祉大学)
藤渕明宏 (九州女子短期大学)
内記麻子 (CSKホールディングス)
高橋一夫 (常磐会短期大学)
関根 努 (鴻巣市立吹上小学校)

宮川幹平 (東海大学福岡短期大学)
折本綾子 (創価女子短期大学)
森本由佳子
(国際交流基金日本語国際センター)
窪田 尚
古本裕子
中原久志 (兵庫教育大学附属中学校)
桑原千幸 (京都文教短期大学)
大西貞憲

■学生会員 40名

上田勇仁 (熊本大学大学院)
櫻井みや子 (東北大学大学院)
安斎勇樹 (東京大学大学院)
坂本知春 (山口大学大学院)
我妻優美 (東京大学大学院)
足立史歩 (大分大学大学院)
畔田暁子 (筑波大学大学院)
今村こころ (早稲田大学大学院)
岩切弘行 (東京工業大学大学院)
船戸健司 (岐阜大学大学院)
竹内一真 (京都大学大学院)
王学颯 (岐阜大学大学院)
松本多恵 (奈良女子大学大学院)
陌間 智 (滋賀大学大学院)
鎌倉哲史 (東京大学大学院)
鈴木健介 (日本医科大学大学院)
風戸恵美子 (青山学院大学大学院)
菊地奈緒美 (青山学院大学大学院)
弘中貴子 (日本女子大学大学院)
健名宏樹 (北海道医療大学大学院)

宇田美幸

(情報セキュリティ大学院大学)
手塚千尋 (兵庫教育大学大学院)
吉田 葵 (津田塾大学大学院)
大塚真二 (徳島大学大学院)
石川久美子 (兵庫県立大学大学院)
増山一光
(情報セキュリティ大学院大学)
麻生真弓 (東京学芸大学大学院)
植田清一 (熊本大学大学院)
道津未来 (早稲田大学大学院)
宮崎祐未 (早稲田大学大学院)
高木輝彦 (電気通信大学大学院)
曹 建霞 (東京工業大学大学院)
杉谷義和 (兵庫教育大学大学院)
上之園哲也 (兵庫教育大学大学院)
棚原生磨 (早稲田大学大学院)
新原勇介 (静岡大学大学院)
榛葉桂一 (静岡大学大学院)
鈴木幸介 (静岡大学大学院)
大和恵子 (関西大学大学院)
西本彰文 (熊本大学大学院)

■准会員 5名

五十嵐和義
三好一英
加藤靖代 (ハルビン工業大学)
玉置 崇
小西祥二

◎学会日誌

- ・2010年9月18日(土)～20日(月)
第26回全国大会(金城学院大学)
- ・2010年10月23日(土)
研究会「メディアの活用と教育・学習環境」(茨城大学)
- ・2010年12月18日(土)
研究会「ICTを活用したFDと大学・高大連携」(大分大学)
- ・2011年02月19日(土)～20日(日)
冬の合宿研究会「質的データを分析しよう!」(チサンホテル札幌)
- ・2011年03月05日(土)
研究会「学校現場に対する支援」(静岡大学)

◎国際会議の案内

2010年

E-Learn

<http://www.aace.org/conf/eLearn/>
(10/18-22 Orlando, Florida)

mLearn2010

<http://www.mlearn2010.org/>
(10/19-22 Valletta, Malta)

ICCE 2010

<http://www.icce2010.upm.edu.my/>
(11/29-12/3 Putrajaya, Malaysia)

2011年

SITE 2011

<http://site.aace.org/conf/>
(3/7-11 Nashville, Tennessee, USA)

ED-MEDIA 2011

<http://www.aace.org/conf/edmedia/>
(6/27-7/1 Lisbon, Portugal)

CSCL 2011

<http://www.isls.org/cscl2011/home.htm>
(7/4-11, Hong Kong, China)

お問い合わせ先 E-mail

- 論文投稿に関するお問い合わせ
編集委員会 editor@jset.gr.jp
- 研究会の開催についてのお問い合わせ
研究会事務局 study-group-core@jset.gr.jp
- 全国大会の開催についてのお問い合わせ
大会企画委員会 taikai2010@jset.gr.jp
- 合宿研究会やシンポジウムの開催についてのお問い合わせ
企画委員会 kikaku@jset.gr.jp
- ニュースレター編集に関するお問い合わせ
広報委員会 kouhou@jset.gr.jp
- その他のお問い合わせ
学会事務局 office@jset.gr.jp

広報委員会

編集長：清水康敬

担当副会長：永岡慶三

広報委員長：赤倉貴子

幹事：伊藤剛和

委員：永田智子，皆川武，宮田仁

E-mail：kouhou@jset.gr.jp

発行所●

日本教育工学会事務局

〒141-0031

東京都品川区西五反田1-13-7マルキビル

TEL&FAX 03-5740-9505

E-mail：office@jset.gr.jp

<http://www.jset.gr.jp>

郵便振替00180-2-539055

日本教育工学会ニュースレター

No. 174

2010年9月8日

発行人●永野和男